

## —第32編— 鐘楼と運河のまち、ブルージュ<sup>\*1</sup>

秋の風情が似合うベルギー、ブルージュの街角に飛ぼう。この国は、フラマン語、フランス語、ドイツ語の三つの言葉が住み分けをしながら共存する欧州の王国である。その独特な立場を活かして、EU（欧州共同体）の議会が置かれている。北にオランダ、南にフランス、東にドイツと国境を接するいわば三つの異なる文化圏から見れば、その辺境に位置するベルギーという小国が、今や27カ国を要する欧州共同体の中心的な役割を果たしているというわけだ。

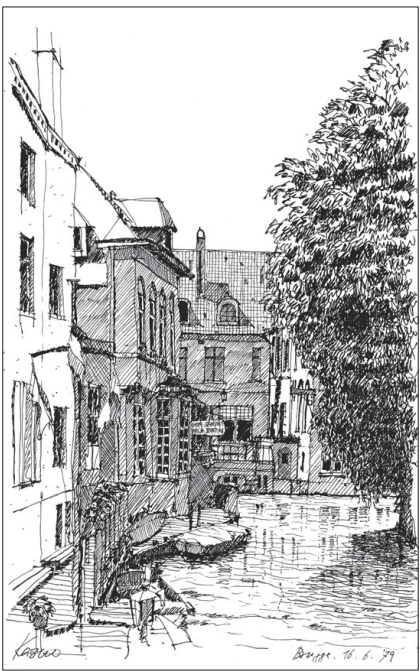
その首都ブリュッセルは、中世から近世の繁栄した時代の名残を強く感じることできる大都市である。しかし、フランスのパリとは異なり、三つの文化圏が互いにせめぎあう緊張感と要素が混在する、とても独特な雰囲気横溢している（第31編参照）。

それに対して、ブルージュ（ブルッヘ）は、首都の北西90km、北海沿岸から15kmに位置する、中世の町並みを保存し再生した典型的な欧州の古都（ユネスコ世界遺産）である。その起源は9世紀の城塞とされるが、12世紀の大津波でできた水溝をベースにして運河を整備し、海運の拠点としたことからこのまちの繁栄が約束された。北海への玄関口として発展した13世紀の金融・貿易とともに成立した（資本主義）市民社会だが、その象徴として数多の鐘楼を造り、教会や王から自立した存在理由を初めてその景観と時を刻む鐘の音に託したのである。

海運が廃れた後も19世紀に再生された運河網が、「北のヴェニス」と異名を取るほどの魅力に溢れた中心市街地（ブルッヘ歴史地区）を形作っている。そして赤煉瓦の修道院群と鐘楼群が密集するその佇まいが独特な都市景観を形成し、歩いて巡る度にさまざまな発見があり心がときめく、そんな町並みが密実に連なる。小ぶりの魚市場の周辺には魚料理が看板のフランス料理レストランが並び、その味は客人の期待を裏切らない。

あくまでもヒトの目線で動き、見ることを基本にして作られた街である。だから、そのどこをとっても人体の寸法から不用意に逸脱することはない。こうして長い時を経て市民が手にしたまちづくりの成果を、心から愛し、誇りにできる幸せを、訪問者である私たちは素直にうらやましく思う。

時間から、車から解放されたれ、カメラを手放し、ゆっくりとした気分の中で絵筆を走らせたくなる街の代表格である。



図版32-1 ブルージュ旧市街地の街角

<sup>\*1</sup>  
Bruges: フラマン語ではブルッヘ (Brugge)